

丹沢トレッキングクラブ10年の歩み

TTC10周年記念誌編集委員会編著

1. まえがき

1997年3月、11名の発起人によって旗揚げした丹沢トレッキングクラブ（略称：TTC）も早いもので、創立満10年を迎えようとしている。今回これを記念し、5周年記念誌「やまなみ」に続き、10周年記念誌「やまなみ No.2」を発行することになった。この記念誌を構成する記事の中心には、やはり「TTCの10年の歩み」を据えないわけにはいかないだろう。

10年も立つと、発足当時の記憶も大分薄れがちであり、活動の証である種々の資料も離散したり、紛失したりしてしまっているものもある。また、発足時のメンバ33名も今では19名と少数派になり、その分、TTCの生い立ちを知らない新しいメンバが増えつつあるのが現状である。

そこで、発足時の経緯をはじめとするその後10年間の歩みについて、過去の資料に基づいて、できるだけ客観的かつ正確に記述するとともに、これらデータに種々の分析を加えることにより、TTCが今後とも地域の山岳同好会として活発な活動を進めていく上での問題点、課題、基本的な考え方等についても言及したい。この小文が今後のTTC活動指針策定の際の一助になれば幸甚である。

2. TTC発足の経緯

まずはじめに、11人の発起人により、1997年3月にTTCが創設されるに至った経緯について述べなければならない。

TTCをともに創設することになった厚木市および愛川町在住の11名の同志は、1991年以降同じ地域山岳同好会の会員になったことによって知り合うことになった。11名の大半は、当時この山岳同好会の役員の一員として活動していたが、地域同好会としての活動のあるべき姿との乖離に心を悩ませ、どうしたら解決できるのかを議論していくうちに、必然的に自分たちで新しい山の会を立ち上げる以外に解決の道はないとの結論に達した。

自分たちが創ろうとする理想の山の会の姿とはどのようなものであるべきなのか？ 11名のメンバが何度も何度も話し合い、意識が一つにまとまるまで議論しあってできあがったものが、「TTC設立趣意書」と「丹沢トレッキングクラブ規約」である（本

誌第2部/資料集1に収録）。TTC設立の精神と理想は、ほぼこの2つの資料の中に凝縮されている。

クラブの名称についてもあれこれ議論した末、地元の方であり、我々の心のふるさとである丹沢山塊にちなんで「丹沢トレッキングクラブ（略称TTC）」と決められた。そして、第一回山行として、丹沢三ノ塔ヨモギ尾根が選ばれ、1997年4月に発起人9名によって挙行された（2名欠席）。その時の写真を見てみると、全員が40～50歳代の若さであり、生き生きはつらつとした姿で写真に収まっている。



1997.4.13 丹沢三ノ塔ヨモギ尾根にて第1回TTC山行を実施。

その翌月の5月17日にTTC設立総会が開催されたが、TTC旗あげの情報を聞きつけた多くの岳友が集まり、設立総会時には33名のメンバにふくれあがった。

3. 活動の基本方針

TTCの理想と精神は、「自然を愛し、山を愛し、人を愛し、変わらぬ友情を育むことを目的とする」と定めたTTC規約第2条に集約されている。

また、設立趣意書には、「山仲間として太い絆で結ばれた生涯変わらぬ信頼と友情を何よりも大切に、メンバ全員の総意に基づいたメンバ全員の直接参加による民主的でオープンなクラブ運営を基本方針としたい。」とその決意が表明されている。

上記基本方針を具現化するものとして、以下の活動方針が定められ、多少微修正はされながらも、この10年間、TTC活動の基本方針の骨格として受け継がれてきている。

まず、第一にメンバのWillを何よりも大切に、民主的で開かれたクラブ運営に徹することである。

そのため、会長職はおかず、数名～10数名の世話人による集団指導体制を敷き、基本的にすべての案件は、毎月1回開催する例会に諮って、けんけん諤々議論したうえ、全会一致で決定するものとした。対外的に存在が必要な TTC 代表には、世話人の互選により選出した世話人代表がその任にあたるものとした。しかも、世話人代表は、同一人が長期間務めると、どうしても弊害が目立つようになることから、メンバが交代でその任にあたるものとした。

クラブの民主的運用の基本は、情報公開と情報の共有化にある。そのため、TTC の活動状況と動向をメンバに逐一正確に伝える役割とともにメンバ投稿原稿による紙面作りを基本とした TTC 通信と、例会を欠席したメンバにも例会での議事内容や決定事項を正確に知って頂くための手段としての例会議事録とを、TTC における広報活動の両輪と位置づけ、毎月定期発行することに力を注いでいる。

山行計画を提案するに際しては、定型フォーマットを定め、登山に必要な情報を網羅し、一定レベル以上に仕上げた山行計画書を、また、山行実施後には、山行実施報告書を作成して、それぞれ全員に配布することとした。山行実施報告書には、詳細な会計報告と行程所要時間、並びに、行程中に発生した細かなトラブルやアクシデント等の不都合な部分も包み隠さず記録・報告し、それをメンバ全員に周知して、TTC 全員の共通財産としている。

年間山行計画立案に際しても、毎年メンバ全員から希望する場所を推薦戴き、その結果を最大限尊重して、時期やレベル等のバランスも配慮しながら、世話人会で議論して、年間山行計画を作成・提案している。また、次年度の活動方針を決定する際も、メンバ全員に意向調査アンケートを提出頂き、その多数意見に従って、活動方針を決定している。しかも、アンケート結果や山行推薦場所等の回答集計結果は、メンバ全員にすべて周知するとともに、世話人会での原案決定までの議論過程や計画決定までのすべてのプロセスをメンバにオープンにするよう、とくに留意している。

TTC 運用費用については、使用目的を明らかにし、かつ目的別に金額を決めて、お預かりすることを基本とするとともに、常に経費節減に努め、必要最小限の会費で賄う工夫を怠らないようとくに留意している。TTC は山好きが集まって活動している同好会であり、手弁当、無料奉仕活動が原則であるとの共通認識にたち、世話人会活動や山行でのリーダー等のスタッフにもすべて無料奉仕を基本原則としている。出費増はその都度工夫して押さえ、会創設以来月額

300円の会費で賄っている。

TTC の目的の一つとして、万が一発生してしまった場合の山岳遭難に際しての相互扶助体制を構築することと、その基盤の一翼を担う遭難対策基金積立、山岳保険加入の重要性を強く意識し、その充実にも力を入れている。具体的内容については後述する。

TTC 活動の大きな目的の一つは、「安全で楽しい山歩き」を実践することにある。そのためには、前述した遭難対策基金の積立や山岳遭難保険の加入等の財政基盤の確立以上に、TTC として常に努力し続けなければならない重要な施策がある。それは、安全登山に関する知識や技術を学ぶだけで留まらず、メンバ全員に安全登山意識の重要性を啓蒙し、登山行動においては、安全が何ものにもまして常に最優先するという行動規範を根付かせることにある。そのためには、TTC として安全登山に関する知識・技術・意識向上の勉強会を企画し、繰り返しこれらを学習することによって全員が確実に安全登山意識を身につけることが重要である。

TTC としても一つ重要視している方針として、個人情報保護に関連した個人の健康管理に関するルールがある。重要な個人情報である健康状態に関するメンバ情報は、TTC としては基本的に関知しない。その代わりに、健康管理はメンバ各自が自己責任において確実に実施して頂くということである。これは、前所属同好会で、会への提出を義務づけていた健康状態に関する個人データが宗教活動に悪用されたという苦い経験から出た方針である。

個人情報保護と情報公開の相矛盾する問題は、その後のメンバ携帯電話番号リストの整備や TTC 公式ホームページの掲載内容等において、現在 TTC が直面している大きな問題の一つであるが、具体的内容は関係する各章で詳述する。



過去10年間のTTC主催山行での最大の危機:TTCパーティが遭難の危険に遭遇した八ヶ岳縦走(1997.10)。一夜明けた赤岳稜線は氷雪の世界に変容。危険を冒して氷雪の赤岳キルトの岩場ルートを下山する事態に遭遇。

表1 丹沢トレッキングクラブの10年間の主なイベント／トピックス

年度	月日	主な出来事
1997年度 (H9年度)	3月16日	11名の山仲間が発起人になり、「自然を愛し、山を愛し、人を愛し、変わらぬ友情を育む」ことを目標に掲げ、全員参加による民主的運営を基本に、安全で楽しい登山を実現する地域山岳同好会を創立をすることを決定。
		クラブの名称を丹沢トレッキング(TTC)とし、設立趣意書、丹沢トレッキングクラブ規約、会費、遭難対策基金積立、活動基本方針等を決定。
	4月13日	丹沢三ノ塔ヨモギ尾根にてTTC第1回定例山行を9名の参加者の下に実施。
	4月19日	TTC通信第1号発行。
	5月17日	TTC設立総会が33名の賛同者により、厚木市緑ヶ丘公民館で開催。世話人11名(発起人)、初代世話人代表にMYさんを選出。
	9月14日	ドライハによるマイクハス運転初山行(上州荒船山)。2000.4に正式にTTCメンバに加わり、専属ドライバとして定着。
	12月15日	TTCメンバのお一人であるYNさんが病のため逝去。奥秩父クリスマス山行(12/20-21)の際、金峰山の稜線にて故人が望んで果たせなかった南ア北岳に向かって黙祷を捧げる。 31回の定例山行を計画し、27回実施(うち、宿泊山行11回)、延べ参加者数360人。
1998年度 (H10年度)	3月7日	H10年度総会開催。新世話人11名(新任3名)、世話人代表留任。会員34名。現会員の推薦があれば会員50名を限度に新加入を認めることを決定。
	8月23日	臨時徴収(一人¥2500)によりコピー機購入(¥85,000)。保険加入(スポーツ団体傷害保険、厚木市ふれあい保険、日本山岳会特別共催)。TTCカンパ金制度創設。カンパ金により早速共同装備として9mm径/40m長ザイル購入。 南ア仙丈が岳大滝/頭付近を下山中のTTC13名ハーフ中、女性メンバが転倒して左足腓骨を骨折。メンバが交代で北沢峠まで背負って自力下山。 37回の定例山行を計画し、30回実施(うち、宿泊11回)、延べ参加者352人。
1999年度 (H11年度)	3月11日	H11年度総会開催。世話人代表にSYさん選出。TTC通信発行担当者がKTさんかKTさんに交代。会員数39名でスタート。 27回の定例山行を計画し、26回実施(うち、宿泊10回)、延べ参加者数337人。
	3月18日	H12年度総会開催。定例山行の他に、平日山行制度を創設。世話人代表にKTさんを選出。会員34名でスタート。 定例山行24回、平日山行10回を計画し、定例山行21回(うち、宿泊4回)、平日山行10回(うち、宿泊3回)実施し、延べ参加者数386人。小出力無線機2台購入。
2001年度 (H13年度)	3月10日	H13年度総会開催。休会制度創設。世話人代表留任。会員35名(その他休会中4名)でスタート。
		安全登山教室開講3回(5月～7月)。
	5月13日	第2真富士山(静岡県)を下山中、女性メンバが転倒して手指骨折事故発生。
	12月15日	TTC5周年記念誌「やまなみ」発行。 TTCハーモニカクラブ発足(メンバ10名)。 定例29回/平日9回の山行を計画し、定例25回(うち、宿泊7回)/平日6回(うち、宿泊1回)実施し、延べ参加者426人。
2002年度 (H14年度)	3月16日	H14年度総会開催。世話人代表にKTさんを選出。TTC通信発行担当者がMYさんに交代。会員38名(その他休会中3名)でスタート。
	11月17日	丹沢鍋割山にて5周年記念集中登山実施(29名参加)。 安全登山教室6回開講。とくに、「安全登山のための生理学」を集中的に勉強。
	2月	TTC公式ホームページオープン。 定例28回/平日9回の山行を計画し、定例24回(うち、宿泊7回)/平日6回(日帰りのみ)、延べ参加者429人。共同装備としてテント2張購入(その他、1張寄付を受ける)。
2003年度 (H15年度)	3月15日	H15年度総会開催。世話人代表留任。会員36名(その他休会中4名)でスタート。TTCマイカ山行の車両利用規程制定。
	7月10日	北海道大雪山旭岳～トムラウシにおいてTTCとして初めて4泊5日の天幕縦走を実施。
	9月27日	安全登山教室の一環として厚木市消防隊を講師に招き「救急救命蘇生法実技講習」をはじめ、都合5回の登山教室開催(うち2回はPC教室)。電子メールの普及率73%に達する。 定例29回/平日10回の山行を計画し、定例25回(うち、宿泊13回)/平日5回を実施し、延べ参加者391人。TTCホームページアクセス数:約3200件。共同装備として5W無線機購入。
2004年度 (H16年度)	3月20日	H16年度総会開催。世話人代表にSYさんを選出。平日山行に代わり、提案山行創設。TTCメンバ提案山行運用規定、TTC個人山行届出規定制定。会員36名(その他休会中4名)でスタート。
	10月	TTC活動方針に関するメンバ意向調査アンケート実施。安全登山教室4回実施。 定例25回/提案6回の山行を計画し、定例22回(うち、宿泊10回)/平日6回(うち、宿泊1回)を実施し、延べ参加者318人。TTCホームページアクセス数:約2150件。日本トレッキング協会会員に加入登録(2月)
2005年度 (H17年度)	3月19日	H17年度総会開催。世話人代表にSSさんを選出。会員37名(その他休会中7名)でスタート。
	4月10日	TTC会員を50名を限度に積極的に増やすとの方針から、丹沢鍋割山にて「仲間作りの登山教室を開催(ゲスト参加21名)。
	7月	TTC通信・TTC例会議事録:100号記念号発行。
	10月	TTCメンバから初めて2名の日本百名山登頂者(THさん、SFさん)。安全登山教室9回開催。活動方針に関わるメンバの第2回意向調査アンケート実施。 定例13回/提案15回の山行を計画し、定例10回(うち、宿泊5回)/提案13回(うち、宿泊9回)、延べ参加者364人。TTCホームページアクセス数:約2559件。
2006年度 (H18年度)	3月18日	H18年度総会開催。世話人代表留任。10周年記念行事決定(記念誌発行、イベント山行)。会員43名(その他休会中4名)でスタート。
	7月14日	幌尻岳山行で新たに3名の百名山登頂者誕生(IYさん、MSさん、MYさん)
	7月	TTC主催山行への申込み・取り消しに関する規定制定。
	8月	TTCホームページアクセス者数10000件達成。アクセス1万件目の方に記念品贈呈。
	10月	活動方針に関する第3回意向調査アンケート実施。安全登山教室6回実施(10月まで実績)。
	3月	TTC10周年記念誌発行(予定)。丹沢三ノ塔ヨモギ尾根で10周年イベント山行(予定)。 定例12回/提案12回を計画し、10月末時点で、定例7回(うち、宿泊2回)/提案8回(うち、宿泊5回)、延べ参加者数189人。

4. 活動の概要

創立以来今日までの約10年間のTTCの主な出来事、イベント、トピックス等について、表1にまとめて示した。なお、活動分野毎の活動内容の詳細については、以下の各章に述べる。

4.1 TTC主催山行

TTCが主催する山行には、以下の3種類がある。

- (1) 定例山行
- (2) 平日山行(2000年度～2003年度)
- (3) メンバ提案山行(2004年度～)

定例山行は、年間計画として年度当初には日程と場所があらかじめ定められたもので、メンバからの山行希望場所アンケート集計結果を参考にして世話人会で作成し、総会で承認を受けた山行計画で、TTCが主催する山行の中心をなすものである。原則としてメンバのほぼ全員が参加できるレベル★★(いわゆる一般コース/歩行時間：約6時間以内が目安)以内としている。事前に定められた立案担当者が計画書を作成し、その内容を計画係がチェック、必要に応じて修正する。このようにして完成した計画書を世話人会に諮って承認を受けたのち、至近の例会に提案する。募集定員も特別な事情がない限り制限しない。

平日山行は、主として週末に実施する定例山行と並んで、平日に実施する山行として、2000年度に創設され、2003年度末までの4年間継続実施した。平日山行は、主として(氏名削除)の3氏のご努力によって企画運営されたが、諸般の事情により2003年度末で休止になった。

メンバ提案山行とは、山行に対するメンバからの多様なニーズを満たすものとして、2004年度に新設された。現状では、定例山行と並んで、TTC主催山行の2本柱になっている。TTCメンバならばどなたが提案してもよく、提案する場所、コース、日程(ただし、TTC定例山行、並びに例会の実施日は原則として避ける)、スタッフの選任は、提案者の裁量に任されている。ただし、TTC主催山行として、TTCがその催行に全面的な責任を負うという観点から、①計画書を事前に計画係に提出して安全審査を受け、安全登山の観点から変更等のアドバイスを受けた場合はそれに従う。②計画の周知(計画書の配布)はメンバ全員に行う。ただし、③山行レベルの設定に制限なし、④参加資格並びに募集定員等に対する制限条件は計画者の裁量、⑤パーティメンバの半分以下の人数であれば、TTCメンバ以外の参加も可、という点で、定例山行とは異なる。また、提案山行は、

①および②の条件を満たすことによって、TTC主催山行として担保している点で、個人山行とは決定的に異なる。これは、後述するように、スポーツ傷害保険の補償が、TTCが主催する山行(団体行動)しか受けられないことと、TTCが提案山行の安全性に責任を持つという観点から重要な要件である。なお、メンバ提案山行の定義等については、別掲の「TTCメンバ提案山行運用規定」に詳しく定められている(第2部/資料集1参照)。

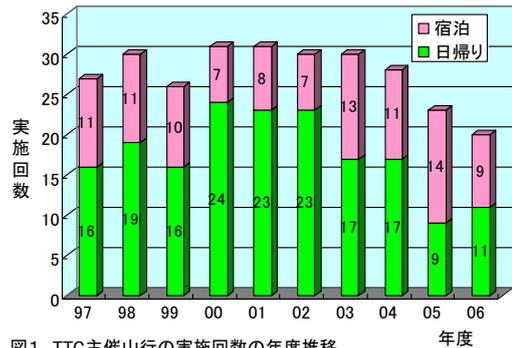


図1. TTC主催山行の実施回数の年度推移

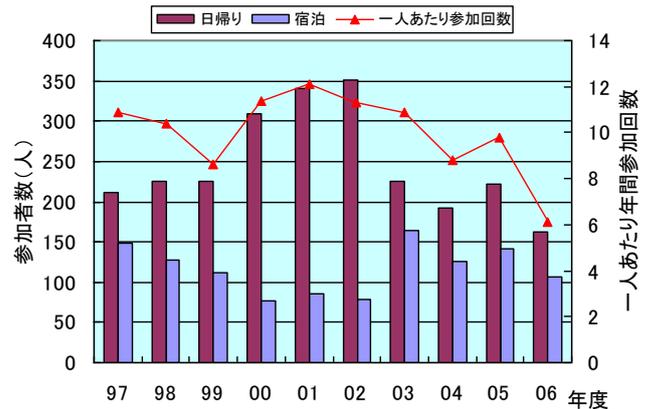


図2. TTC主催山行への参加者数/一人あたりの年間参加数

図1にこれまで10年間のTTC主催山行の年度別実施回数を、日帰り山行と宿泊山行に分けて表示した。2006年度は、4～12月までの実績である。計画したが悪天候等で中止した山行は含まれていない。

月2回の定例山行が標準であった1997～1999年度は、年間25～29回の山行が実施され、そのうち、10回強が宿泊山行であり、その行き先は、南北アルプスや八ヶ岳等の比較的近い場所が多かった。

平日山行が盛んに実施された2000～2003年度は、実施回数が約30回に増えた代わりに、宿泊山行が6～7回に減り、宿泊山行に替わって、日帰り山行が数多く実施された。

2003年以降になると、北海道や九州等の遠距離にあって、登り残している百名山登頂への要望が増え

るとともに、メンバ提案山行制度が発足したことにより、メンバのニーズが山行計画により直接的に反映されやすくなった。これら両者の効果が相まって、より難度の高い山行や遠距離の大雪山・トムラウシ天幕縦走山行等が計画・実施されるなどした結果、再び宿泊山行の回数が10回以上に増加した。

TTC主催山行での冬季雪山登山は、北八ヶ岳や丹沢蛭ヶ岳等への雪山山行が中心で、南北アルプス等での本格的な冬山登山は、TTCの実力を越えるものであり、これまでほとんど実績はない。本格的な沢登りやロッククライミング等についても同様である。

宿泊山行は、春秋は1泊、夏の南北アルプスのビック山行でも、小屋泊まり3~4泊が中心である。2005年実施の北海道ビック山行での6泊7日というのが、これまでのTTC山行での最長記録である。

TTC主催山行への参加者数と、会員一人あたりの年間参加回数をグラフにしたものを図2に示す。年度によって、年間参加者数に変動はあるが、日帰り山行は、200~350人/年、宿泊山行は75~150人/年である。山行1回あたりの参加者数(パーティ構成メンバ数)は、日帰りで平均13~14人。宿泊山行では約10人である。メンバー一人あたりの年間平均参加回数は、9~12回の範囲である。TTCに席はあるが、体調や家庭の事情等で実質的に活動休止中のメンバが10~15%存在する。それらの方々の非活動分を差し引いて考えると、大部分のTTCメンバは、平均して月に1回山行に参加していることになる。このように、TTC全体としては、設立以来活発な山行が継続して実施されている。

TTC10年間に実施した山行は日帰り175回、宿泊101回/合計276回で、延べ参加者数は3,635人にのぼる。また、最近TTCメンバから5名の日本百名山登頂達成者が相次いで誕生した。2005年度には、AさんとBさんが、そして、2006年7月の幌尻岳山行では、Cさん、Dさん、Eさんの3名が見事百名山登頂を達成した。

この10年間に発生した傷害保険支払い対象となる骨折事故等のアクシデントは表2示す3件であるが、幸いなことに救助へりを要請するような山岳遭難事故例は一件もない。また、事故には至らなかったが、一つ間違えれば、遭難事故になった可能性が高い4件をヒヤリ・ハット事例として表3に示した。この中で、仙丈ヶ岳下山中の大滝ノ頭付近で女性メンバが転倒して左足骨折の怪我を負った1998年8月のアクシデントはTTCがこれまで経験した最大の山岳事故である。この時は、メンバが交代で怪我

人を背負って北沢峠まで自力下山した。この仙丈ヶ岳の骨折事故は、我々TTCにとって、安全登山に対する考え方と取り組みを大きく変える契機になった。すなわち、これ以降TTCメンバの共通認識として、徐々にではあるが、安全登山最優先が根付いて行った。その査証として、表4にTTC主催ビック山行における実施途中での撤退事例(出発前に中止・変更した事例は除く)を示す。仙丈ヶ岳以降、その回数は8回にのぼる。北海道等の遠方まで出向いて行ってからの中止や撤退の決断は、同行メンバの意見取纏めにおいてもかなり厳しいシーンもあるが、TTCメンバ全員の意識が安全登山第一で一致しているので、中止/実施の判断を巡って、これまでにトラブルになった事例はない。そういう意味でも仙丈ヶ岳登山は、TTCにとって重要なエポックとなった。

警察庁集計の最近数年間における年間山岳遭難事故発生件数は1300件台で推移しており、その約80%は50歳代以上の中高年登山者が占めている。労山傘下組織登山者の年間山岳事故発生確率は1/60~1/70というデータが発表されている。他方、TTCでの事故は統計に乗らない軽微な怪我のみであるが、その年間事故(怪我)発生確率は、約1/125(1/1000人・回以下)である。TTC主催山行では、2000年5月に発生した第2真富士山での手指骨折事故以来、幸いなことに6年以上大きな事故は発生していない。しかし、表3に示したヒヤリ・ハット事例のように、一歩間違えば大きな事故になりかねない事例もある。また、最近山以外の日常生活でのちょっとした不注意による転倒や交通事故等によって、TTCメンバの骨折、打撲、捻挫、脱臼等の怪我が目立ってきている。これも加齢による反射神経・筋力の衰えだけではかたづけられない問題である。

最後にIドライバとTTCとの出会いについて一言触れる。Iさんには、TTC発足直後の荒船山山行(1997.9)の際に、運転代行会社派遣ドライバとして初めてマイクロバスのハンドルを握っていただいた。TTCの雰囲気ですっかり気に入り、2000年度からTTCの正式メンバになった。以来今日までTTCの専属ドライバとして、早朝から深夜まで東に西にとハンドルを握っていただいていた回数はゆうに150回を越える。おかげさまで片道300kmまで日帰圏となり、TTCの行動範囲が格段に広がるとともに、居眠りしながら帰路に着くことができる。

この10年間の間に実施されたTTC主催山行の年度別山行実施結果を、本文末に付録として収録したので、詳細は本付録をご参照頂きたい。

No.	事故の名称	発生年月	山行名	当事者	発生状況	保険金給付状況		
						厚木市市民活動保険	スポーツ団体傷害保険	日本山岳会特別共済
1	手指骨折(全治約1ヶ月)	1998.2	西沢渓谷氷瀑見物	56歳女性	新雪の林道を歩行中転倒して手を突く。帰宅後医師の診断を受け骨折と判明。		○	
2	左足腓骨骨折(全治約2ヶ月)	1998.8	南ア仙丈ヶ岳	55歳女性	大滝/順付近を下山中、木の根に足を取られ転倒し、左足腓骨骨折。メンバが交代で背負って北沢峠まで下山。2名が付き添い、広河原から救急車にて榎形町の救急病院に搬送。応急手当を受けた後、上記2名が付き添い厚木帰着。	○	○	
3	手指骨折(全治約1ヶ月)	2000.5	真富士山	56歳女性	第2真富士山(静岡市)を下山口間近の林道まで下山したが、草付きの登山道で足を取られ転倒。突いた指が痛むため、公共の乗り物を利用して、本人のみ帰宅し、医者への診断を受け骨折と判明。	○	○	
TTC主催山行の事故発生確率: 3/3551=1/1184(0.084%)。【参考データ】都岳連傘下組織の山岳事故発生確率: ~1/150								

No.	事例の名称	発生日時	山行名	当事者	発生状況
1	転倒による胸部打撲	1998.2	西沢渓谷氷瀑見物	56歳男性	東沢山荘付近の登山道でアイゼンの爪を引っかけて転倒して胸を打つが、軽い打撲。
2	転倒による足膝打撲	2004.9	羅臼岳	62歳女性	羅臼岳羅臼平を歩行中転倒し、膝を強く打撲したが、内出血程度の軽傷ですむ。
3	転倒による手首捻挫	2004.9	斜里岳	64歳女性	強風で飛ばされたバンダナを取ろうとして尾根道を踏み外し、ハイマツの中に転倒した際、手首をひねり軽い捻挫。
4	滑落による擦り傷	2004.11	日光太郎山	62歳女性	新藤登山道の急坂を登っている際、足を滑らせ約5m滑落したが、運良く擦り傷のみで済む。

表4. 悪天候等の理由により行程途中で撤退ないし行き先変更したTTC主催ビック山行

No.	山行名(行程)	実施年月	理由	内容
1	北ア燕・槍・穂高岳縦走(4泊5日)	1999.8	悪天候	燕・槍ヶ岳を縦走し、南岳側から大剣山降下口に立ったが、好天が期待できないことから大剣山越えを断念し、氷河公園に下山。同日大剣山越えを強行した登山者1名が、難所飛騨立き付近で滑落死亡。
2	安達太良山(1泊2日)	2001.5	強風	安達太良山頂上を越えてくわね小屋に1泊。翌朝、土湯峠方面に縦走するため、馬ノ背の橋脚に立ったが、強風のためこれ以上進むのは危険と判断し、岳温泉にそのまま下山。
3	北ア雲ノ平・鷲羽岳・水晶岳(4泊5日)	2002.8	悪天候	三俣山荘まで行ったが、その後の日程での好天が期待できないことから、雲ノ平・鷲羽岳・水晶岳の登山を断念し新穂高温泉に引き返す。同日朝、岳友のTさんが五竜岳で滑落死亡。
4	鳥海山(夜行1泊2日)	2002.8	強風	鈴立口より七合目御浜小屋まで登ったが、強風のためこれ以上進むのは危険と判断。登頂を断念して下山。2年後再挑戦し頂上に立つ。
5	利尻山(3泊4日)	2005.7	強風	強風でこれ以上進むのは危険と判断し、6合目で撤退。翌日礼文岳登山の予定をキャンセルして利尻山登山に再挑戦し、見事登頂を果たす。
6	幌尻岳・十勝岳・羊蹄山(6泊7日)	2005.8	増水	幌尻岳登山口まで行ったが、前日までの大雨で額平川の水量が多く、渡渉は危険と判断し、入山を諦め、目的地を大雪山方面に変更。翌年再挑戦して登頂を果たす。
7	九重山・阿蘇山(2泊3日)	2006.5	強風	阿蘇山山崎尾根を高岳頂上に向かったが、強風でこのまま進むのは危険と判断し途中で撤退。
8	雨飾山(1泊2日)	2006.1	悪天候	登山口の小谷温泉に1泊し、翌朝登山口まで行ったが、悪天候が予想されたので、雨飾山登山を早々に諦め、好天が期待できる編笠山に目的地を変更。この日、山は大荒れし、白馬岳や穂高岳を中心に10件の遭難事故(凍死者6名)が発生した。



1998.8の南アルプス仙丈ヶ岳山行。下山中女性メンバが足を骨折し、メンバが交代で背負って自力下山。本山行はその後の安全登山に対するTTCの意識改革のエポックになった。

4.2 TTC例会

TTC活動基盤の一つに、月一回の月例会開催がある。原則として、第3土曜日の午後7時から9時までの2時間。会場は、厚木市緑ヶ丘公民館を中心に、睦合南公民館や小鮎公民館で開催してきた。3月例会は、前年度の活動報告、新年度計画や会計報告/予算、世話人選任等の審議をする年度総会をかねて、また、12月例会は1泊泊まりの忘年山行の際に開催するのが慣例になっている。

例会では、山行計画の提案・説明、山行実施結果の報告、山行募集、世話人会報告をはじめ、TTCの重要案件は、すべて報告され、審議される。例会に先立って安全登山教室を、終了後にビック山行参加者への説明会も実施している。また、写真の交換をは

じめ、メンバの重要なコミュニケーションの場となっている。

図3に例会出席者数と出席率の年度推移を示す。出席者総数は、220~300人/年で、出席率はおおむね60%台で推移しているが、2000年度のみ55.6%に低迷した。当初、世話人の意識として、例会の位置づけを、TTCの総意を決める最高意志決定機関との考えが強かった。このため、民主的プロセスを重要視する余り、議事進行が堅苦しくなり、かつ主催者側の一方通行になりがちだった。

2000年度の出席率低迷を経験してからは、厳密になりがちな民主的手続きを簡略化して、堅苦しい議論をできるだけ避け、ワイワイ話し合える場を多く持つように改善するとともに、例会に先駆けて、安全登山教室を開催する機会を多く設定し、一般メンバにとって、月1回の例会出席が楽しみになるよう工夫・改善を図った。この改善効果もあり、再び60%台の出席率に回復した。しかし、例会の進行が、時間的制約もあり、一方通行になりがちであるという弱点を払拭できたわけではない。

また、例会に出席できなかったメンバへの例会決定事項等の情報周知手段として、毎回議事録を発行し、メンバ全員に配布している。

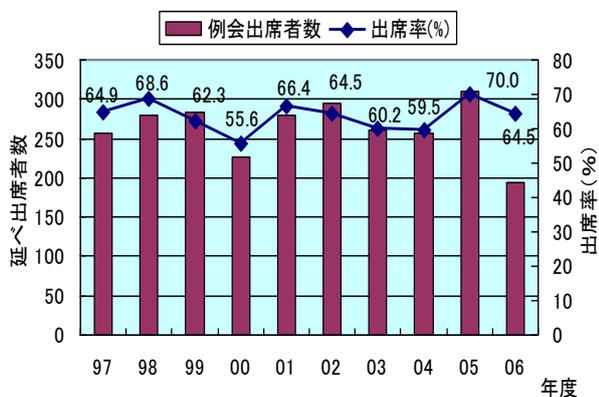


図3. 例会出席者数と出席率の年度推移

4.3 世話人会

表5にこれまで10年間の世話人の名前と、その担務表を示す。当初、11人の発起人がそのまま世話人に就任したが、その後、新規加入されたメンバにも徐々に世話人をお願いしている。現在の世話人13名中、発起人メンバは5名に過ぎない。世話人による集団指導体制を敷くTTCでは、世話人代表は、1年任期/2期で交代するのを慣例としてきた。

これまで、世話人代表は、6代/5人、会計係は2代/2名、TTC通信発行責任者は3代/3名がそれ

ぞれ担当してきている。今後もTTCのよき伝統を守っていくと同時に、世話人の世代交代を確実に進めていく必要性を痛感している。

世話人会の開催は、原則として毎月1回、例会開催に先駆け、0.5~1時間開催している。議題は、TTC主催山行計画の内容検討と安全審査の他、活動方針や運用等TTC活動全般にわたる。世話人会の意志決定は全員一致を原則としている。次年度の活動方針を議論し、山行場所の世話人案を作成する臨時世話人会は、毎年1月に開催し、約1日掛けて審議のうえ、世話人案を決定している。この案は、3月の総会に諮られて、TTCの活動報告、活動方針、予算決算案として決定される。

なお、メンバに電子メールが普及した最近では、電子メールを利用しての世話人会稟議の機会が確実に増えつつある。

4.4 TTCハーモニカクラブ

TTC内には、ハーモニカ演奏を趣味にしているメンバが多い。山行場所への行き帰りのマイクロバス車内でのハーモニカ演奏や、それに合わせた合唱が自然発生的起こり、同好者を増やしてきた。

そんな状況の中、2001年冬にTTCハーモニカクラブが誕生した。当初TTCメンバを中心に10名程度で練習を重ね、その成果を地元の老人施設、自治会や公民館の行事等で披露してきたが、最近では、演奏技術も高度になり、コンサートや他の音楽グループとコラボレーションをするまでに腕をあげた。

また、最近ではTTCメンバ以外のメンバも増えたこともあり、2007年度からは、ハーモニカクラブとして、TTCから独立した存在とし、なお一層の飛躍を図って行く予定である。

4.5 安全登山教室と遭難対策

メンバの相互扶助の一環として、TTC設立当初より、毎年度当初に一人3000円の遭難対策基金を預かり、100万円を目標に積み立ててきた。設立9年目の2005年に目標の100万円に達したが、100万円では、民間ヘリ2時間分の費用に過ぎないことから、継続して積み立てるとのメンバ多数意見により、積立を継続している。また、万が一の場合の遭難対策基金の使い道を明確にする目的から、2003年度には「TTC個人山行届出規定」を制定した。これにより、事前にTTCに登山届が提出された個人山行に対しても、メンバ遭難時のTTCの物理的・金銭的な支援体制、並びにTTCとしての免責条件等を明確に定めた。

表5 年度別世話人およびその担務表

担務	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度
世話人代表										
世話人副代表										
会計係										
広報係(TTC通信発行)										
議事録作成係										
ホームページ運用係										
資料発送係										
連絡係										
救護係										
山行計画係	氏名削除									
山行募集集計係										
技術係										
装備係										
会場予約係										
個人山行受付係										
顧問										
会計監査										

表6 TTCの規約・規定類リスト

No.	規約・規定の名称	制定年月	HP掲載の有無	備考(改定履歴等)
1	丹沢トレッキングクラブ設立趣意書	1997.3	×	TTC設立に際しての発起人11人による決意表明
2	丹沢トレッキングクラブ規約	1997.5	○	TTCの会則。休会及び復会の項目追加(2001.3)
3	ドライバ謝礼金基準	2001.8	×	TTC専属ドライバに運転をお願いする際の謝礼ルール
4	TTCマイカー山行の車両利用規定	2003.1	○	マイカー利用山行が増えてきた事態に対応して制定
5	TTC共同装備貸出規定	2003.7	○	TTC所有共同装備のメンバーへの貸し出しルールの明確化
6	TTCメンバー提案山行運用規定	2003.12	○	提案山行創設に当たり、提案山行を定義
7	TTC個人山行届出規定	2004.3	○	個人山行時の万一の場合のTTCとしての支援体制等
8	TTC主催山行への申込・取消しに関する規定	2006.7	○	TTC主催山行への申込・取消のルール・キャンセル料のルール化

表7. TTCメンバーが加入している保険の概要

保険の名称	種類	保険料(年額)	保険金支払い対象と保険金額(最高額)						保険金支払対象		備考	
			遭難救助費用(円)	死亡保険金(最高)	後遺障害(最高)	入院給付金(1日)	通院給付金(1日)	突然死(日射病等)	障害責任賠償額(最高)	TTC主催山行		個人山行
スポーツ安全保険(加入区分C)	団体傷害保険	1,500円	0	2,000万	3,000万	4,000円	1,500円	160万	対人5億/対物500万	○	×	所属団体管理下における事故。並みに現住所から現地までの経路往復中の事故。届出種目:軽登山。
厚木市市民活動保険	団体傷害保険	0円	0	500万/1,300万	500万/1,300万	3,000/3,700円	2,000円	0	対人5億/対物500万	○	×	基本的に同上。保険対象者は厚木市在住・在勤者。一般メンバーと指導者では補償支払金額が異なる。
日本山岳協会特別共済(型)	山岳遭難保険	3,000円	300万	300万	300万	2,000円	0	0	対人/対物とも1億円	○	○	常時、ビッケル、アイゼンザイル等を使用しないで登れる軽登山が対象。高山病、疲労、疾病は対象外。

*:支払い対象期間は事故の日より180日以内。そのうち、通院給付は90日以内。

表8. 安全登山教室開講及び山岳保険等の加入状況

年度	開講回数	特記事項
1997	0	スポーツ団体傷害保険に加入
1998	0	骨折事故を契機に日本山岳協会特別共済に加入
1999	2	装備、地図の読み方等の初級講座
2000	3	地図の読み方、計画立案等の初級講座
2001	3	装備、地図、コンパス、山の天気等の初級講座中心
2002	6	「安全登山のための生理学」4回シリーズ中級講座
2003	5	救命救命生法の実技講習、アミノ酸サプリメント
2004	4	山岳遭難事例研究、気象学、体脂肪低減効果等
2005	9	その時々々の安全登山に関する話題を中心に勉強
2006	6	過去に実施した安全登山講習の復習が主体

TTCメンバーの安全登山に対する意識は、前述した

なお、TTCには、前出した規約・規定類の他、TTCを公正に運用するために必要ないくつかの規定類を制定し運用している。これらTTC規約・規定類のリストを表6に示す。規定類の本文は、本誌第2部/資料1に収録してあるので参考にして頂きたい。また、規定の大半は、TTC公式ホームページにも掲載されている。

ように、1998年8月に南アルプス仙丈が岳で発生

した骨折事故を契機に大きく変わった。

TTC のスローガンのひとつは「安全で楽しい登山」であるが、正直「安全」は観念として理解していても、具体的な安全行動や安全施策としては、ほとんど実行されていなかった。この山岳事故を契機に、日本山岳協会特別共済の山岳遭難保険(年額一人3000円の掛け捨て)に緊急加入した。それまで加入していた保険は、スポーツ安全保険(団体傷害保険)と厚木市市民活動保険(団体傷害保険、厚木市在勤・在住者が対象)のみであり、遭難救助費用は保険の対象外であった。もし、負傷者の救助に民間ヘリの出動を要請して、数百万円という多額の費用が発生した場合、TTC または本人が全額負担しなければならない。前出の特別共済の遭難救助支援費用が、一人最大300万円という補償内容で十分かどうかの議論はあるが、とりあえず、万が一の場合の金銭的な備えは一応整備された。なお、TTC メンバが現在加入している3種の山岳保険の内容については、表7にまとめて示してあるので、詳細は本表を参照していただきたい。

発足当時の33名のTTCメンバは、大多数が数年以上の登山経験者であった。そのため、TTCとして登山技術や知識の勉強会を組織だつて開催する必要性はとくに感じてはいなかった。そのため、山行の行程途中で、時折、地図の読み方や磁石の使い方等の実施指導をする程度に過ぎなかった。

しかし、仙丈が岳でのアクシデントを体験した以降、安全登山教育の必要性を痛感するようになった。そこで、翌1999年度からようやく安全登山知識の勉強会を開催するようになった。当初は、年に2~3回のペースで、装備、天気、地図、計画立案等の一般知識から始まり、2001年頃からは安全登山に関わる知識を勉強し始めた。とくに、2002年度に4回にわたって開講した「安全登山のための生理学」では、人間が有酸素運動した際の医学的・生理学的な作用、筋肉や脳の疲労メカニズムをその基本原理から学び、安全登山を実践するには、何が一番重要か?を本質から理解することができた。それ以降、毎年5回以上のペースで、厚木消防隊を招いての救急救命蘇生法の実技訓練、BCAAアミノ酸サプリメントの疲労低減効果や筋力疲労軽減登山グッズ、中高年の基礎体力と日常の筋肉トレーニングの重要性、遭難事例研究、最新登山ウェア・装備類の知識習得、著名登山家の安全登山に関する提言、等々を学んできた(表8参照)。勉強会は、主として、例会前の1時間を充て、特定の1~2人の世話人が講師を務めて

いる。また、これら安全登山講座を補完するものとして、TTC通信に「安全登山豆知識」のコーナーを設け、安全登山に関する身近でタイムリーな話題を数多く取り上げ、毎月掲載するよう努力している。

現在のTTCメンバには高度な登山技術はほとんど必要ない。必須なのは安全登山に関する知識と技術を深く学び続けることにより、登山活動において最も重要な行動指針は「安全第一主義」であり、人命に関わるような山岳遭難事故は、メンバからは絶対出さないという強い決意をTTCメンバ共通の意識として定着させることにある。また、山仲間遭難事故死を出してしまった山岳同好会メンバが受ける精神的苦痛は計り知れないものがあることを、身近な例で我々は知っている。仲間から遭難事故を絶対出さないという思いの重要性を我々に気づかせてくれたのは他ならぬ仙丈が岳山行であったといえる。

このような経過をたどりながら、TTC主催山行の行動指針としての「安全第一主義」が、TTCメンバのコンセンサスとして自然に定着して行った。この結果として、すでに表4に示したように、たとえビック山行の行程途中であっても、悪天候であれば、全員一致であっさり撤退するというTTCの安全第一主義の行動規範が定着した。また、その結果として、この6年間大きなアクシデントを1件も起こさずにすんでいるという実績につながったと考える。

しかしながら、TTCの主力メンバの加齢による最近の基礎体力・筋力の衰えはまぎれようもない事実である。日常生活のちょっとした不注意から、怪我をする事例が最近目立つようになったのも、それを査証するもといえる。このような古参メンバには、日常の筋力トレーニングの重要性を啓蒙するとともに、自らの体力に合ったシニアメンバ用山行計画を立案し、「山つき温泉山行」等に象徴されるゆとりの山行に切り替えてゆく必要性を痛感している。もっとも、これはTTCとして強制するものではなく、あくまでもメンバ個々人が判断することである。

なお、2003年頃になると、TTCメンバの間では、山行計画書並びに山行実施報告書を作成するのに、ワープロソフトを使用してPC上で行うのが標準的になり、インターネット検索による情報収集や、電子メールによるメンバ間の情報交換等も広く利用され始めた。それに伴い、メンバからPCや電子メールの使用方を教えて欲しいとの声上がり、2003年度には、PCやインターネットの基本原則、電子メールの基本的操作方法等についての基礎講座を2回開催し、TTCメンバのIT化推進に寄与した。

4.6 クラブ運営費と共通装備の整備

表9にTTCとしてこれまでに取り揃えた登山用共同装備、ならびに備品のリストを示す。メンバから寄付していただいたテント1張、ツェルト2張、日光白根山で遭難者の遺体を発見し、栃木県防災ヘリへの遺体収容作業を手伝った際に(2006年5月)、偶発的な理由で栃木県からご寄付いただいたザイル2本を除いて、TTCメンバが費用を出し合って購入したものである。

TTC発足直後に購入する必要があったコピー機は、メンバ全員が一人3000円を拠出して購入したが、それ以外は、TTCカンパ金会計という、TTC独自のシステムで資金を調達して購入した。また、5周年記念誌制作費の大半もこのカンパ金会計で賄った。今回の10周年記念誌の制作費用も同様である。

カンパ金システムとは、山行終了時の会計精算処理の際、一人100円以下の端数を集めて、カンパ金会計としてプールしておき、金額の張る共同装備の購入資金に充てようというものである。その後、テント等の購入資金や5周年記念誌制作費用等を捻出するため、一山行あたり一人100~300円程度カンパ金を上乗せして頂くようになり、現

在に至っている。これにより、年間約5万円のカンパ金が集まり、この資金で表9に示すように、これまで7点の共同装備を購入するとともに、5周年記念誌制作資金に充てた。

クラブ運営に直接必要な費用は、月300円(年間3600円)の会費ですべて賄っている。費用の大半は山行計画書、山行実施報告書、TTC通信、例会議事録、安全登山テキスト等の各種資料の製作に関わる用紙代、コピー代、並びに郵送料で占められている。活動が活発になればなるほど、資料が増え、月会費300円では苦しく、会費値上げを検討したときもあった。しかし、メンバの賛同をえて、従来から実施してきたTTC通信と例会議事録のメンバ全員への郵送を取り止め、電子メールのあるメンバには2005年度より電子メールに添付しての電子ファイル配信に変更した。

2006年11月現在のTTCメンバの電子メール普及率は実に84%(44人のメンバ中、37名)にのぼる。平均年齢60歳を超えたグループの電子メール普及率としては、驚異的な数値といえよう。これにより、毎月約3000円の郵送料を1000円台に節約できた結果、会費値上げの危機は当面回避できた。

表9 TTC所有備品・共同装備一覧

No.	品名	数量	購入金額	入手年度	規格・仕様等
1	コピー機	1台	120,109	1998	富士ゼロックスXC810型
2	ザイル	1本	15,592	1998	8mm径x40m長
3	小電力無線機	2台	33,013	2000	ファルコン社製、出力0.6W/周波数400MHz帯トランシーバ
4	レスキューベルト	1本	2,730	2002	怪我人運搬用
5	テント No.1	1張	55,965	2002	モンベル製4人用、グラントシート付(黄色)
6	テント No.2	1張	58,852	2002	ヘリテージ製エスパースーパライト(3シーズン4人用/緑色)
7	テント No.3	1張	0	2003	ヘリテージ製エスパースマキシム(3シーズン3人用/緑色).YM・TH、KSさん寄贈
8	5Wトランシーバ/レシーバ No.1	1台	35,490	2003	icom IC-T90型(3バンド無線機+レシーバ)
9	5Wトランシーバ/レシーバ No.2	1台	31,290	2004	icom IC-T90型(3バンド無線機+レシーバ)
10	ツェルト黄色	1張	0	2005	ICI製2~3人用(黄色)、内張りリム1本つき、MYさん寄贈
11	ツェルト緑色	1張	0	2005	ヘリテージ製2~3人用(緑色)、内張りリム1本つき、SYさん寄贈
12	ザイル	2本	0	2006	12mm径x50m長固定用ロープ、栃木県防災ヘリより寄贈
			353,041		



北海道大雪山・トムラウシ天幕縦走山行(2003年7月実施)。夕立降りしきるヒサゴ沼畔の泥田の上にテント設営。TTCの山行形式の幅を大きく広げる記念すべき山行となった。



4年越し2度目の挑戦で念願を果たした幌尻岳山行。額平川の渡渉は丹沢水無川本谷での2度の渡渉訓練の成果が大きくものをいった。

4.7 広報活動とTTCホームページの運用

TTC 活動の根幹をなす重要方針の一つとして、メンバへの情報公開の徹底と情報の共有化がある。その具体的手段として、毎月1回発行するTTC通信と例会議事録はその両輪であり、2006年12月でともに117号目の発行となる。

TTC通信には、山行実施報告・至近の山行予定、各種お知らせ、メンバ動向等の情報の他、メンバ全員による紙面作りの観点から、メンバのリレー投稿記事を連載している。「会員のプロフィール」、「私の一山」の2シリーズの掲載が終了し、2006年11月号より、3巡目の「心に残る山行」シリーズの連載が始まる。その他、「安全登山豆知識」とタイトルを付けたコラムを連載している。安全登山意識を高めるために有用と思われるタイムリーで身近な話題を選んでその都度記事にしている。TTC通信と例会議事録は、大多数のメンバによく読まれており、その記事内容も役に立っていると支持されている。

このようなメンバの意向や意識・動向等に関するアンケート調査を、毎年秋に実施して、その結果を次年度の活動方針策定に生かしている。2005年10月に実施したアンケート集計結果を本文資料として添付してあるので詳細はそれを参照頂きたい。また、過去5年分のTTC通信を本誌第2部/資料集1に収録してあるのでそちらも合わせてご覧頂きたい。

世話人の一人であるK氏のご努力により、2002年2月にTTC公式ホームページがオープンした。山行時のスナップ写真や山行実施記録、TTC通信等が素早くアップデートされるため、多くのTTCメンバがその日を心待ちし、頻繁にアクセスして楽しんでいる。また、ヤフー等のポータルサイトから「丹沢」のキーワードでTTCが検索できるようになった。これにより、TTCメンバ以外からのアクセスが確実に増えた結果、TTCの知名度も上がり、TTCのホームページを閲覧して、是非入会したいという方からの入会の問い合わせが増えている。

なお、TTCホームページへの年間アクセス数は、2003年度：約3200件、2004年度：約2150件、2005年度：約2560件で、2006年8月には、総アクセス数が1万件を突破した。

現在、TTC通信、山行実施記録をはじめとするTTCの主要な資料は、すべてA4版用紙に印刷することを前提にワード、エクセル等のワープロソフトによって編集されている。これら資料をホー

ムページ掲載に適したHTML形式に変換することは、罫線処理等の技術的問題から現状ではそう簡単ではない。そこで現在、ワードやエクセル形式で作られた資料は、やむを得ずすべてPDFファイルに変換して、ホームページに掲載している。従って、ホームページで閲覧した際、読みにくい、キーワード検索が利かない、ホームページに掲載するに不都合な固有名詞等を簡単に直せない等の技術的問題がある。個人情報保護の観点からも改良すべき問題点を孕んでいるものと認識しているが、マンパワーの観点からも現状ではうまい解決策を見いだせていない。

現在のTTCホームページの運用管理は、すべてK氏のボランティアによってなされている。2006年秋に実施された厚木地区の光ネットワークへの切り替え工事をよい機会と捉え、TTCホームページを容量1GBの有料サービスサイトに移行する計画である。これが完了すれば、ホームページの容量が一気に一桁増え、また、K氏以外の担当者を加えた運用管理が可能になる。そうすれば、TTCホームページのなお一層の充実と、新たな活用場が拓けるものと期待される。

メンバの個人情報は、TTCとして極力保持しないというのが、TTCの基本方針の一つであることは既に述べた。そういう観点から、TTCメンバの携帯電話番号リストは意識的に作成してこなかった。ところが、2002年10月に実施した岩木山・八甲田山山行での夜行バスによる横浜出発の際、買い物に出たメンバの一人が横浜駅構内で迷子になり、結局予約の夜行バスに乗車できなかった。対応に当たるために残留した2名のメンバとともに、翌朝一番の新幹線に乗って本隊の後を追うという予想しなかったハプニングを経験することになった。このとき、もしTTCメンバの携帯電話番号リストがあれば、すぐに本人からリダに連絡できた。その事件の反省から、例会でメンバの賛意を得たうえで、TTCメンバの携帯電話番号リストを直ちに作成した。

このようなTTCメンバの個人情報は、あれば便利には違いないが、TTCとして個人情報のセキュリティ対策に自信がもてない現状では、持つとしても必要最小限に留めたい。また、前述したホームページ上でのTTCメンバの氏名や顔写真等のメンバ個人情報をどのように保護していくべきか？という問題の対策としては、一般公開ページとTTCメンバ限定のページを分ける等の必要最小限のセキュリティ対策が必要であろう。

4.8 クラブの維持と世代交代・リーダーの育成

図4にTTCメンバ数(年度当初)の年度推移を、また、図5に平均年齢の推移を示す。33名のメンバで発足したTTCは、その後2005年度当初までの8年間、30人台のメンバ数で推移してきた。TTC設立から2004年度当初頃までは、新規の会員を積極的に募集することはせず、TTCメンバの紹介で、加入したいという方がいらっしゃれば、入会を受け入れるという程度であった。従って、毎年退会する人数と、入会する人数がほぼ拮抗していたことから、メンバ数は30人台でほぼ一定という状態が続いた。このように、新規会員の入会については、とくに積極的な施策をとってこなかったため、メンバの平均年齢は、図5に示すように、必然的に毎年確実に1歳ずつ上がり、発足時の1997年に平均年齢が約55歳であったものが、5年後の2002年度には60歳を突破した。このような状況になってくると、TTCメンバの山登りに対するニーズが、まだまだレベルの高い山や未踏の百名山に積極的に登りたいというメンバと、体力の限界を感じて、ほどほどの山に登ればよいというメンバとに二分されてくると同時に、クラブ全体の活性度の低下が目立つようになってきた。

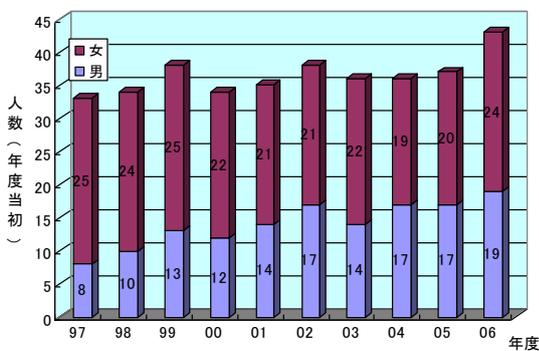


図4. TTCメンバ数の推移

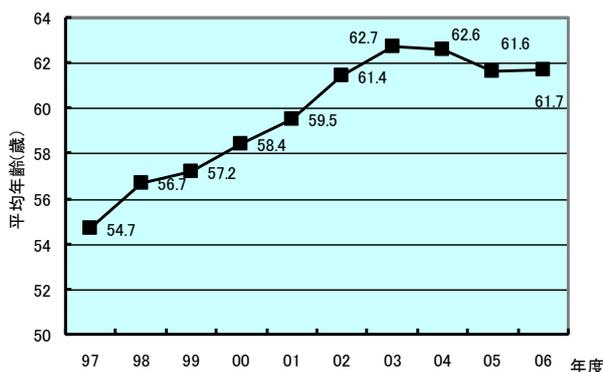


図5. TTCメンバの平均年齢の推移

2004年度になり、TTCの将来をどうするのか? TTCメンバ内で大いに議論があった。メンバの意見は、①現メンバのまま活動できる限り活動し、活動できなくなったら自然消滅でもよいとする意見と、②安全で楽しい山登りをしたいと思っている中高年は沢山いるのだから、TTCのよき伝統を受け継いでいただける山好き仲間を積極的に勧誘して、TTCに入会して頂き、TTCの運営を新しいメンバにバトンタッチすべきという意見に二分された。前出のアンケートでメンバ全員の意向を聞いたところ、②の意見の方が約80%の数意見であったことから、TTCメンバの定員を50名と定め、定員の範囲内で、新規メンバを初めて積極的に募集してみようと言うことに決まった。

そこで、具体的施策として、2005年4月に丹沢鍋割山で「仲間作りの登山教室」を開催した。その結果、21名のゲスト参加者があり、TTCの知名度アップに一定の貢献はしたが、苦労した割には、メンバの加入にはほとんど結びつかなかった。しかし、その後TTCのホームページを見て加入したいという方が、次々に現れ、2006年度スタート時には、メンバ数が44名まで増加した。一方、毎年1歳ずつ上昇していたメンバの平均年齢も、2002年度以降は61~62歳台でほぼ一定となり、TTCメンバの平均年齢の高齢化に一応歯止めがかかった状態が続いている。また、メンバの男女比率であるが、発足当時は女性メンバの比率が75.8%と圧倒的に女性が多かったが、徐々に男性メンバが増え、2006年度当初における女性メンバの比率は55.6%まで下がり、男女の比率が拮抗するまでになった。

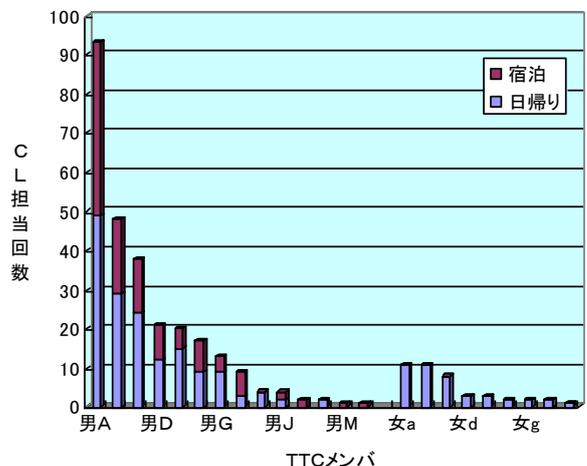


図6. TTC主催山行のチーフリーダーの個人別担当回数

また、TTCには休会／復会という制度ある。この制度はメンバの要請を受けて、2001年度に新設されたもので、体調不良や仕事の都合等でTTCでの活動が困難になった場合は、本人の申し出によりいつでも休会できる。復会する場合も同様である。これまでにこの制度を利用して、一時休会后、現役復帰されたメンバが3名いらっしゃる。いずれも、現役のTTCメンバとしてご活躍いただいている。

他方、これまで10年間のTTC主催山行でチーフリーダーを担当したメンバの個人別担当回数をグラフにして図6に示す。10回以上のチーフリーダーを担当したメンバは、男性が7名、女性が2名であり、女性が常にメンバの過半数を占めているにもかかわらず、女性メンバがリーダーを勤めた山行は13.7%に過ぎず、TTC主催山行のチーフリーダーには男性が担当する場合が圧倒的に多い。また、これまでに女性メンバが宿泊山行のチーフリーダーを担当した実績はない。TTC山行の場合、チーフリーダーは男性、サブリーダーや会計、救護、班長等の山行スタッフは女性が担当するケースが多く、そういう意味では、男女の役割分担が進んでいるともいえる。

一般的に言って、チーフリーダーには、安全登山に関する知識・技術、体力、統率力、状況判断力、メンバから信頼される人間性等々の総合的な資質が求められる。このようなリーダーとして理想的な資質をすべて具備しているような人材は滅多にいない。また、悪天候や思わぬアクシデントに遭遇したときのリーダーにかかる精神的プレッシャーは計り知れないものがある。そういう点からも、自らはリーダーをやりたいが、*「連れてってもらおう」*という消極的な姿勢に終始するメンバがTTCの中に多数存在するのも事実である。また、チーフリーダーをやると、山行時のコースタイムをメモしたり、事後に山行実施記録書を作るのが、面倒だからやらないというメンバがいるのもまた事実である。

そのような状況の中で、図6から一目瞭然に分かるように、チーフリーダーを積極的に引き受け、これまでの10年間のTTC主催山行をリードしてきた3名の男性メンバが存在していることを忘れてはならない。この3名だけで、担当したチーフリーダーは、179回／56.6%、宿泊山行に限れば、77回／66.9%にのぼっている。

10年の歳月がたち、TTC創設当時は血気盛んであった上記3名の男性メンバも、今では60歳代半ばとなり、体力・気力の衰えは隠しようもない。

TTCのリーダー層の薄さを危惧し、2～3年前より、ニューリーダーの育成に腐心してきた。一部成果は上がりつつあるものの、現状ではその成果は十分とはいいがたい。この1～2年以内にTTCに加わっていただいた新しいメンバを含めて、これからのTTCを背負っていただけるニューリーダーを育て、スムーズにバトンタッチして行くことが、TTCにとって当面の最大の課題である。



2004年4月。丹沢鍋割山でTTC主催「仲間作りの登山教室」を開催した。メンバの加入には直接結びつかなかったが、TTCの知名度を上げるのには大いに効果があった。

5. むすび

客観的データに基づき、TTCのこれまで10年間の足跡をできるだけ正確に記述し、今後のTTC活動に役立つ資料となるよう腐心した。

また、最近入会されたメンバには、十分ご理解いただけていないTTC設立当時の経緯や、TTCスピリッツについて、できるだけ詳細に記述するよう心がけた。さらに、各種のデータに分析を加え、TTC活動の問題点や今後の課題等についても言及した。

本文が10周年記念誌の巻頭を飾るにふさわしいTTC10年間の活動記録資料として、TTCメンバに末永く愛読され、また、今後のTTC活動指針を決定する際の参考資料として、有効に活用していただけることを願いつつ、筆を置く。

【文責：三村 義昭】

【付属資料1】年度別TTC主催山行実施結果
(1997年度～2006年度)

【付属資料2】TTC活動方針に関わる意向調査アンケート集計結果【2005年10月実施】